

第1～5回学校のあり方検討委員会の意見整理

【前提】海陽町の10年後、20年後を見据えた検討

4つの視点	基本的な考え方	現状	住民アンケート調査結果	委員の意見（海陽町の学校のあり方委員会）
教育	<ul style="list-style-type: none"> ●1学級あたりの児童生徒数の適正基準はない。1人でも学級ができないことはない。 ●1学級あたりの最大人数は、学級編制基準により、徳島県では小・中学校ともに全学年が35人となっている（国は小学校で一部40人（段階的に35人へ）、中学校は全学年40人）。 ●特別支援学級は、小・中学校ともに、国や県も最大8人となっている。 ●複式学級は、小学校は2つの学年にわたって16人となっている（小学1年生を含む場合は、あわせて8人）。中学校は2つの学年にわたって8人となっている。 ●学級数によって教員の数が決まる（養護教諭や栄養教諭、事務職員は除く）。 ●すべてが複式学級になってしまうと、教員確保はまったくできない（すべて解消できるような教員は県から加配してもらえない）。 ●海陽町は、就学前から高校までの教育が完結できる環境が整っている。 ●国の通学圏の基準として、通学距離は小学校でおおむね4km以内、中学校でおおむね6km以内となっている。通学時間は小・中学校ともにおおむね1時間以内が目安。 	<ul style="list-style-type: none"> ●小学校3校（海南・海部・穴喰）、中学校2校（海陽・穴喰）体制。 ●ALTは本来より多い配置をしているが、各校1人ずつという状況ではない。 ●グローバル教育の推進員は、町が単独で雇用している。 ●複式学級に対しては県や町から教員を加配し、複式学級を解消している。 ●徳島県教育委員会は、小規模校を存続させるために、小・中一貫校をモデル校として実証している（チェンスクール、パッケージスクール、兼務辞令）。 ●穴喰小学校と穴喰中学校が3年前からチェンスクールのモデル校になっている。 ●児童生徒数の推計では、海南・穴喰地区は減少、海部地区は増加する（令和3年度から令和13年度の比較）。 ●PTA活動は、児童生徒数の減少に伴って、保護者の負担が増している。 ●中学校では、スクールバスを使って合同練習などを行っている。 ●合同で部活動を運営すると、先生が引率しないといけないため、職員会もなかなか持ちにくく、時間的なこともじっくりできない。 ●スクールバスの1日の延べ運行距離は120kmというところもあり、児童のなかには片道40分を超える子もいる。 ●児童生徒へのタブレットの配付は、徳島県下では一番最初に取り組んでいる（令和2年5月に補正予算化してiPadを導入）。 ●小・中学校の視聴覚の先生等を中心としたICT推進の学校教育部会を設立し、個別最適化のソフトであるQubenaを令和3年4月から5教科で導入している。 ●ALTが放課後に直接小学生に話しかける「オンラインホームワーク」をはじめた。 	<ul style="list-style-type: none"> ●小学校の再編・統合について <ul style="list-style-type: none"> ・海南地区と海部地区の意向は「やむを得ない」となっている。穴喰地区では保護者が「避けるべき」の意向が強くなっている。 ・海南地区では「やむを得ない」63.0%、「避けるべき」26.2%で、差は36.8ポイント。 ・海部地区では「やむを得ない」53.5%、「避けるべき」31.4%で、差は22.1ポイント。 ・穴喰地区では「避けるべき」56.1%、「やむを得ない」34.2%で、差は21.9ポイント。「避けるべき」は、40代以下（保護者）は5割を超えている。一方、50代以上（地域住民）は「やむを得ない」と「避けるべき」がともに4割。 ●中学校の再編・統合について <ul style="list-style-type: none"> ・すべての地区の意向は「やむを得ない」が多くなっているが、穴喰地区の保護者は「やむを得ない」と「避けるべき」に意向が分かれている。 ・海南地区と海部地区の保護者は「やむを得ない」が6割を超えている。 ・穴喰地区の保護者は「やむを得ない」と「避けるべき」がともに4割。 ・海南地区と海部地区はともに穴喰地区との再編統合は「やむを得ない」、穴喰地区は再編統合を「やむを得ない」と「避けるべき」に分かれている。 ●学校の適正規模・適正配置について <ul style="list-style-type: none"> ・『小・中学校のすべての学級でクラス替えができる規模にする』という考えについては、海南地区では「そう思う」、海部地区では「そう思う」と「そう思わない」が同じ割合となっている。穴喰地区では「そう思わない」が多くなっている。 ・保護者の意向を見ると、海南地区は、「そう思う」、海部地区と穴喰地区は「そう思わない」となっている。 ●学校体制について（小学校1校・中学校1校体制） <ul style="list-style-type: none"> ・保護者の意向を見ると、海南地区は「そう思う」、海部地区と穴喰地区は「そう思わない」となっている。 ・地域住民の意向をみると、全ての地区で「そう思わない」となっている。ただし、海南地区と海部地区では「そう思わない」と「そう思う」はほぼ同数。 	<ul style="list-style-type: none"> ●子どもの人権や命を守るためにも、中学校の学級数を2つにする。 ●海部高校のあり方についても、地元の海陽町が支えていかないといけない。 ●子どもが減少して、子どもたちが学習やスポーツで十分に取組む機会が減ることは残念で考えていけないといけない。 ●ICTを使った遠隔授業などで、田舎では体験できないような活動や交流をする。 ●デュアルスクールもこれからどんどん増やしていく。 ●ある程度の規模というものは、園や学校の運営で必要になる。 ●ひきこもりや不登校の子に対して、ケアワーカーや相談できる先生をきちんと配置する。 ●タブレットを有効に活用するために、ソフトの導入・更新も進めていく。 ●ICT教育を推進する一方、リテラシーについても学校や家庭で教えていかないといけない。 ●高校と中学校をつないで高校の先生に授業をしてもらったり、中学校の先生が小学校の授業をして専門性を高めるなどという発想をもって取り組む。 ●学校の近くに町営住宅があれば優先的に入ることができるようにすることで、遠方からスクールバスで通学する子の負担を軽減する。 ●少人数校でも学校に行きづらい子にとっても、いい教育環境をつくっていく。 ●学校を荒れさせないためにも人材確保は重要であり、中学校については一気に統合ではなく2校体制が望ましく、段階を経て状況に応じて進めていく。 ●避難所運営の課題解決学習などにおいて、アクションカードなどを提示することで、子どもたちが自ら動くことができる体制をつくる。 ●人数が少ないなりに選択肢（※）のある学校体制が好ましい。 ※いろいろな子どもと接することで刺激をもらって成長する、手厚いフォローがいる、不登校や学校へ行きにくいけれど頑張る学校へ行きたいからこっちの学校を選ぶ、牟岐の中学校へ行くなど

		<ul style="list-style-type: none"> ●海南小学校では在宅（オンライン）授業というところまではできていないが、タブレットを持ち帰ってプリント学習をしたり、家で写真を撮ってきて学校でみんなと共有して話し合いの材料にするといったことを進めている。 ●通学距離の基準（小学校4km、中学校6km）を超えると通学補助を出している（町営バスの定期代や自転車補助）。 ●海部小学校では児童数が減ってきて、1人だけが県大会に行くとなった場合、海南小学校と一緒に練習を急にしないといけない状況で、子どもだけでなく保護者の負担も大きくなっている。 ●昔であれば、各学年リーダーになる経験値の高い先生と一生懸命動くことができる若手教員を配置できていたが、現在はその配置が非常に難しい。雑務が非常に多過ぎて、若手教員の熱意や能力、体力が育ちにくい環境にある。 ●発達障がいのグレーゾーンに対するフォローが手厚い。 	<ul style="list-style-type: none"> ●学校体制について（小学校2校・中学校2校体制） <ul style="list-style-type: none"> ・すべての地区で「そう思う」となっている。 ●小・中学校が再編・統合される場合、心配なこと <ul style="list-style-type: none"> ・「家から学校までの距離や通学時間」が63.1%と最多回答。次いで「通学手段」が58.9%、「通学路の安全確保」が41.0%と続く。 ●スクールバスのあり方について <ul style="list-style-type: none"> ・「スクールバスは維持すべき」が67.3%、「スクールバスと路線バスの統合を検討すべき」が26.7%。 ・バスの統合を検討する場合、配慮すべきことは「児童生徒の安全・安心の確保」が72.0%で最多回答。「財政面のコスト縮減額」は39.3%。 ●小・中学校のあり方を審議するにあたり配慮してほしいこと <ul style="list-style-type: none"> ・「児童生徒を指導・支援する教職員数の確保」が58.1%と最多回答。次いで「児童生徒の通学手段」が47.1%、「複式学級になっても長所を活かして存続させる」が32.5%と続く。 	<ul style="list-style-type: none"> ●障がいのある児童生徒に対することも考える。 ●本当は今のままが一番だけれど、将来のことを考えて、致し方なく2校体制（海南小と海部小が一緒になる）とする。 ●現状で都合が悪いということはないので、もう少し今のままの体制でいく。 ●児童生徒の人数も急に減るわけではないので、突喰はこのままでいい。 ●今年や来年はクラス替えができるような学校編成ができなくても、3年後にはクラス替えができるようにする。 ●2年、3年先のところは今の状態で全然いけると思うので、この何年かの間に話を進めていく。 ●少人数だからこそできる田舎ならではのいい環境で教育が進められているので、できるならばこのままの体制がいい。 ●クラス替えがなくても、さまざまな行事にいろいろな児童生徒を参加させることで、違う人と接する機会を増やす。 ●運動部は合同チームのため練習の回数が少なく結果が伴わないので、生徒は文化部系統に流れていく傾向にあり、それを改善する必要がある。 ●小学生のうちにはスポーツをしていても、中学校へ行って好きな部活動に入れないとか、一緒に競争したり部に入る友だちがいなかった文化系の部活動に入る生徒もいるので、合併や少人数校を残すということをもう少し検討しないといけない。 ●デジタルの活動とアナログの活動をミックスしながら児童生徒を育てていく。 ●実際学校に通う児童生徒の現状からすると、友だちが少なくなっているとか、同じ気持ちで部活動に臨めないとか、やはり通うのは本人なので、私たち委員とは違う意見があると思う。 ●今の時点で大体の方向性を考えておかないといけない。 ●保護者目線では教職員数の確保や通学の不安が多く、児童生徒にとっても学校の選択ができるためにも、1校1校ではなく2校2校の方向で検討するのがいい。
--	--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

地域連携	<ul style="list-style-type: none"> ●学校は文化の中心であり、学校のあるなしで地域の活性化がまったく異なってくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●すべての小・中学校でコミュニティ・スクールを導入している。 ●海部郡に1つしかない海部高校と小・中学校のかかわりも大事であり、園校長会や高校の学校説明会(就学前から小・中学校の保護者が対象)をしている。 ●地域のみんなで子どもたちを守ろうという気持ちが増えている。 ●婦人会からお花をいただくという機会がある。 ●海部地区は中学校がなくなって、活気も少し少なくなってきている。 	<ul style="list-style-type: none"> ●小・中学校との関わりについて <ul style="list-style-type: none"> ・「学校行事を通して子どもや地域の人との交流を深めること」が最多回答。特に穴喰地区は、海南地区と海部地区に比べて、その意向が強く出ている。 ●小学校に求めること <ul style="list-style-type: none"> ・「放課後や週末等の子どもたちの活動拠点(居場所)を提供する」が46.0%と最多回答。次いで「地域との活動を通して、地域への理解を深めたり、まちづくりを進める」が39.8%と続く。 ●中学校に求めること <ul style="list-style-type: none"> ・「地域との活動を通して、地域への理解を深めたり、まちづくりを進める」が43.9%と最多回答。 	<ul style="list-style-type: none"> ●地理的・人数的なことだけで判断するのではなく、地域全体のことも考慮する。 ●コミュニティ・スクールをより活性化させていく。 ●地域に出向いて地域のことを学習したり、地域の方が学校に来ていただいているいろいろなことを教えていただくということは、学校にとっても非常になくしてはならない視点。 ●校区が広がっても、旧校区の地域学習などを計画的に取り入れて、子どもたちの地域に対する思いや海陽町に生まれた良さなどを育むことが重要。 ●地域との関わりの中に自分自身がいて、その地域には素敵な人や場所などがあり、それらに支えられて生きているということを感じて欲しい。 ●これからのキーワードは「交流」。学校間の交流によって、自他の良さや現状を知ったり考えていくことが大事になる。 ●保護者にとっては「放課後子ども教室」と「学童保育」の区別がつけにくいかもしれないので発信していく。
まちづくり	<ul style="list-style-type: none"> ●学校は地域コミュニティの核であり、防災や交流の場といったさまざまな機能を併せもっている。 ●学校の跡地利用についても、当委員会としての意見をあげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●学校の位置として、海南小はイエローゾーン、海部小や穴喰小はレッドゾーンにある。 ●穴喰小学校では8年前の台風で体育館の1階部分が浸水した。 ●津波の際、穴喰小学校は愛宕山に避難することになっているが、愛宕山も高くない。 ●海部小学校は地震津波の二次避難場所になっている(一次避難場所ではない)。 	<ul style="list-style-type: none"> ●小学校に求めること <ul style="list-style-type: none"> ・「地域の防災拠点として学校施設を利用する」が31.5%。 ・「地域住民のスポーツや学習、憩いの場として学校施設を開放する」が21.9%。 ●中学校に求めること <ul style="list-style-type: none"> ・「地域の防災拠点として学校施設を利用する」が34.2%。 ・「地域住民のスポーツや学習、憩いの場として学校施設を開放する」が25.8%。 ●小・中学校が再編・統合される場合、心配なこと <ul style="list-style-type: none"> ・「再編・統合された学校の跡地利用」は13.1%。 	<ul style="list-style-type: none"> ●避難所の問題など、子どもたちの防災面や安全安心な学校生活という観点も含めて、一体的に検討していく。 ●大雨や洪水については穴喰がてきめんなので、積極的に安心・安全を守るために取り組む。 ●月1回実施している園・校長会において防災マニュアルをしっかり決めて、子どもたちの命を守る方法を検討する。 ●仮に海南と海部が一緒になった場合、特に文化的に素晴らしい海部が埋没してしまわないように、地域学習等を通して、自分が生まれ育った地域や学校を誇りに思ったり、愛する気持ちをもってほしい。 ●海南・海部・穴喰にはそれぞれのよさがあって、まちづくりの視点からいうと伝統や歴史など奥が深く、子どもたちに語り継いでいってほしい。
学校施設の適正化	<ul style="list-style-type: none"> ●学校施設の個別計画では、2026年度以降に学校施設の長寿命化整備を始める予定。 ⇒建替よりも部分改修を繰り返すことで、長期的なコスト削減をめざす。 ●すべての学校の長寿命化を進めるのではなく、施設の利用方法を明確にしておくことで、必要な学校施設に必要な整備を進める(無駄な費用はかけない)。 	<ul style="list-style-type: none"> ●新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金により衛生部分の改修等は充実している(体育館のクーラーなど)。 ●校舎の補強はしているが、昔の建築設計基準で基本的に建てられているため、震度6強では補強した部分を残して崩れていく懸念がある。 ●現在の学校では引き渡し訓練ができなかったり、非常に難しい状況。親は車で学校へ来て、子どもを連れて帰るが、そのローテーションがなかなか難しい。 		<ul style="list-style-type: none"> ●震度7基準の校舎をつくる。 ●イエローゾーンから外れているところに校舎を建てる。 ●今まで使ってきた机の大きさが、タブレットを置くと狭くなるので、学校施設をそのまま活用するのであれば、その辺りも含めて統合問題を考える。